

本校の取組について(令和4年度)

令和3年度を振り返ってみますと、新型コロナウイルスの影響を受けながらも、2年生の修学旅行を4月上旬に延期、行き先を九州に変更して実施したことに象徴されるように、従来の教育活動を工夫しながら維持することができました。令和4年度1学期においても、文化祭含め、予定されていた行事をすべて実施することができました。

令和3年度の卒業生(74期生)の進路結果は、191名が4年制大学、専門学校に21名、短期大学に5名、公務員が7名、一般就職2名、留学1名、進学準備その他11名となっています。進路先の8割を占める4年制大学ですが、国公立大学合格67名のうち、そのまま国公立大学に進学したものが64名、早慶上智 MARCH 関関同立といわれる難関私立大学の合格者76名のうち実進学者数は32名でした。この二つの進学者数を合計すると96名となり、4年制大学進学希望者の約半数が国公立大学もしくは難関私大に進んだこととなります。74期生の特徴としては、国公立大の医学部、薬学部、看護学部、保健学部等の医療系に例年以上の合格者が出たことが挙げられます。国公立の医療系学部・学科はそもそも定員が少なく他の学部比べて高倍率かつレベルも高いので、74期生の健闘が光りました。また、国立大学の推薦入試での合格者が12名出たことももう一つの特徴です。12名のうち個人探究活動の成果を生かしたものが10名含まれています。74期生は、個人探究活動に学年全員で取り組んできた最初の学年ですので、その成果が大学入試にも現れたこととなります。大学入試改革の大きな柱の一つが、従来の暗記中心の学力だけでなく主体性や課題発見力を大学入試でも評価しようという点にあります。令和4年度の国公立大学入学定員総数は、127,330人で、そのうち推薦・AO入試の定員は27,998人で後期入試の定員16,335人を既に大きく上回っています。国公立大学進学者全体の約22%が推薦・AO入試を経て合格していることになり、中学生の皆さんが大学入試を受験する頃には、おそらく国公立大学進学者のうち4人に一人が推薦・AO入試合格者となっているでしょう。高校時代の部活動や資格、フォーラムへの参加、ボランティア活動等が評価の対象となります。本校で全生徒が取り組んでいる個人探究活動も大学推薦・AO入試の主な評価対象となります。

さて、令和4年度教育活動のトピックとしては、今年度入学生から年度進行で導入される新しい学習指導要領に沿った教育活動が挙げられます。

その最も大きなものは「観点別評価」の導入です。中学生の皆さんはすでに小学校時代からこの観点別評価になじんでいます。高校でこの観点別評価が導入されるのは令和4年度入学生からになります。中学校と同様、「基礎的・基本的な知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体性、協働性」の3観点別に評価されることとなります。本校では長年、100点法20段階で成績を通知してきましたが、今年の1年生からは10点法10段階の通知表に切り替えています。10段階評価に加えて、それぞれの科目にABCの3段階の評価が3観点別に付されることとなります。各高校とも、観点別評価については苦心しているところですが、本校では令和2年度から観点別評価の研究を各教科で始めており、比較的スムーズに導入できています。

もう一つの大きな変化は、今年の入学生からタブレット端末を各自で購入し、毎日授業に持参して使用するBYODが始まったことです。この一人一台タブレット端末を用いた授業についても本校では昨年度から研究が進んでおり、公立高校ではトップクラスの利用率となっています(別添資料「BYOD活用について」参照)。教員のICT活用能力も非常に高く、令和3

年度末の県調査では、「Microsoft Forms や Google フォームを用いて、アンケートや小テストを行うことができる」の項目で、県立高校の平均が 47.3%であるのに対して本校教員は 79.5%ができると回答しています。

2つの大きな変化ですが、本校の特徴は、観点別評価やBYODがそもそも何のために導入されたのかという視点を教員の授業力向上研修会で常に討議している点に特徴があります。教育改革の大きな波も生徒の「確かな学力」や「生きる力」の育成に資するものでなければならぬことを常に全教員で確認しながら進めています。例として、1学期末の職員研修会の資料から抜粋して紹介します。

例1：「ICT活用（BYOD）→ 効果的なICT活用（ICTが必要なのか…）」

1学期で生徒も教師もiPadに慣れることはできた。2学期以降は、どうすれば効果的なICT（iPad）活用ができるのか考えていきたい。また、便利になった反面、iPadと向き合う時間が増え、人と向き合う時間が減った。コミュニケーション能力育成のためにも、どのような生徒を育成したいのかをしっかりと明確にしてICTを活用できるようにしていきたい。

例2：「新しい武器ICT（未知）→ とりあえず使ってみる（成長期）→ 取捨選択（成熟）」

洲本高校では新しい授業方法（ICT活用、GW（グループワーク））に取り組み、全体的にいろいろな授業方法を共有できている。その中で、ICT、GWの良さ、不便なところが見えてきていると思うので、次のステップとして、効果的な分野、そうでない分野を考えながら取捨選択していく時期ではないかと思う。授業目標を達成するために、生徒自身に考えさせる方が良いのか、グループで考えさせ共有させるほうが良いのか、難解すぎるのでこちらから伝えるほうが良いのか、とりあえず演習で進めていく方が良いのか、目標達成のための授業方法も変わってくると思うので、そのための一番の方法を授業担当者がしっかりと考えていく必要がある。

授業の目標を達成するために、どうすれば生徒に伝わるのか、生徒が理解し、納得して次に進んでいけるのか、目標は生徒のためのものであることを忘れずに授業改善に取り組んでいきたい。次の授業研究においては、そういったポイントを踏まえながらグループで協議していきたい。

最後に、島外の高校を進学先候補に考えている中学生の皆さんには、是非、淡路島内の高校の良さを再認識していただきたいと思います。前述のように、大学入試も高校時代の活動を評価対象にする流れができています。島外高校に通う通学時間を豊かな課外活動や個人研究に向けて充実した高校生活を送ることも大事なことだと思いませんか。コロナの波も今後まだまだ何回も襲ってくるにちがいがありません。感染リスクは淡路地区の高等学校にももちろんありますが、都市部の高校に比べればリスクは低いのではないのでしょうか。そして高校時代を淡路で過ごすことは、淡路に人生の「根っこ」を残すことになります。高校卒業後は島外に出て行く人も多いと思いますが、「根っこ」は淡路に残しておいてもらいたいものです。

国語科

- ・ Google Classroom でノート of 課題提出。ノートが生徒の手元に残るので、返却を急ぐことなく課題を提出させることができる。
- ・ Google Classroom の課題につけた点数はエクセルに出力することができ、評価がしやすい。
- ・ Google カレンダーで Google Classroom の課題締切を生徒に確認させることができる。生徒もスマホのアプリに同期ができるので、すぐに締切を確認しやすい。
- ・ 現代文の問題を解いたノートの写真を撮る、もしくはロイロノートに答えを直接入力し、ロイロノートで提出。生徒の解答を短焦点プロジェクターで映し出して共有。これまで指名した生徒の意見しか共有できなかったが、多様な意見を共有することができる。また、提出できない生徒がこちらからすぐわかるため、生徒自身が解答を時間内に解答を作る習慣ができた。
- ・ 生徒が解答をロイロノートで提出し、こちらで解答の共有を設定することで、お互いの解答を見ることができる。
- ・ 夏季休業中にロイロノートを使用し、漢字の小テストを行う。資料箱に漢字テストと解答を入れておき、取り出して自分で答えを書き込む。解答を見て自己採点をし、提出する。ロイロノートはノート機能も充実しているため、書き込みやすい。
- ・ ロイロノートの資料箱に授業で配った演習プリントのPDFを入れておく。そうすることで、繰り返し問題を解くことができ、テスト勉強にも活用できる。
- ・ PDF資料をロイロノートの資料箱に入れることで、印刷しなくてもよいため、気軽に資料を使うことができる。現代文『羅生門』では典拠である『今昔物語』の本文・現代語訳が載ったプリントを資料箱経由で配信し、『羅生門』との比較を行った。

地歴・公民科

- ・ ロイロノートによるスライドの作成、発表、提出。
- ・ ロイロノートによる、他者評価シートの撮影・提出。
- ・ Google フォームによる自己評価、振り返りの入力。
- ・ JamBoard によるバズセッション。


数学科

- ・ ロイロノートと Goodnote の活用
- ・ ロイロノートの提出ボックスへ、予習ノートを Goodnote アプリを用いて書かせて提出
- ・ ロイロノートの回答共有を用いて、生徒同士で考えなどを共有。
- ・ ロイロノートの資料箱を用いて、紙を配布することなくデータのやりとりができる。

6月18日(火) 確率の基本性質 p.45

A, B の積事象 = A と B がともに起こる事象 = $A \cap B$
 A, B の和事象 = A または B が起こる事象 = $A \cup B$

例3
 1個のさいころを投げるとき、
 「偶数の目が出る」という事象を A 、
 「2以下の目が出る」という事象を B 、という。
 積事象 $A \cap B$ は
 ・「偶数かつ2以下の目が出る」
 和事象 $A \cup B$ は
 ・「偶数または2以下の目が出る」
 $A \cap B = \{2\}, A \cup B = \{1, 2, 4, 6\}$



2つの事象 A, B が決して同時に起こらないとき A, B は互いに排反^{相互排斥}である。
 すなわち A, B は互いに排反事象であるという。 A, B が互いに排反であることは $A \cap B = \emptyset$ である。空集合 \emptyset を表はる事象を空事象という。

確率の基本性質
 1. どんな事象 A に対しても、 $0 \leq P(A) \leq 1$
 2. 空事象 \emptyset に対しても $P(\emptyset) = 0$
 3. 全事象 U に対しても $P(U) = 1$
 ③ 事象 A, B が互いに排反であるとき $P(A \cup B) = P(A) + P(B)$
 ← 確率の加法定理という。

理科

- ・生物基礎

Google Classroom内で、資料、課題、動画リンクなどの配布及び課題の提出。

- ・実験レポート作成

顕微鏡写真撮影や目的の細胞を探す作業が、iPadだと比較的容易であり、Good Noteを用いて、撮影した写真をそのまま貼り付けてレポート作成ができる。

- ・実験操作手順のパフォーマンステスト二人一組で顕微鏡操作手順の動画撮影を行い、パフォーマンステストとした。

英語科

- ・Google classroomで予習プリント提出。

教員は授業前に予習の取り組み状況を確認することができる。生徒の手元にもプリントが残るため、すぐに答え合わせなどを行うことができる。

- ・Google classroomで音読課題を提出。

毎週実施している単語小テストに合わせて、音読課題を課している。授業内で一人ひとりの音読を聞き評価することは難しいが、音声ファイルを提出することで、教員が時間のある時に聞き評価することができる。

- ・Google classroomで小テストを返却。

早ければ実施したその日のうちに答案を返却することが可能。生徒は記憶の新しいうちに自分の得点や間違えた問題を確認することができる。

- ・辞書アプリ導入。

保健体育科

- ・テニスの授業で、技能の習熟度別のドリル動画を視聴させ、個々に応じたその内容を練習させる。

- ・テニスや卓球でリーグ戦を実施する上で、リーグ表エクセルファイルに各自で勝敗を入力することで、時間短縮を図る。

- ・保健授業時に、ネット検索を40人同時に行わせ、グループワークに活用する。

家庭科

- ・ロイロノートを使用して、グループ学習を行った。

自分でテキストを作成し、それぞれの作ったテキストをグループ間通信して協議する。グループで協議して完成したものを提出。

- ・夏休み課題として、ロイロノートでホームプロジェクトの発表の資料作りをさせる

- ・Google Classroomを使用して、連絡や資料の添付。

- ・QRコードを読み取り、動画や資料の確認をする（授業中や授業後でも見ることができる）

- ・調べ学習としてインターネットの使用。

芸術科（書道）

- ・教科書掲載のQRコードを読み取り、運筆や用筆等、書法の特徴を動画で確認する。
それぞれの手元で繰り返し再生することができ、個々のタイミングで書法の確認ができる。
- ・Apple TVを使用してiPadをモニターに接続し、動画撮影モードで生徒の作品や揮毫の際の姿勢をリアルタイムで共有する。
- ・ありがちな運筆の間違いや臨書の際の注意点等を、クラスメイトの作品鑑賞を通して理解し、自身の作品を振り返る機会を持つことができる。

芸術科（美術）

【写真表現】水をつかまえる

写真表現は、以前から教科書に掲載されていた題材である。しかし、授業を展開するに当たり必要なカメラの台数を準備できないことから、プロの写真家の写真作品を鑑賞するのみに留まっていた。BYODにより生徒が一人一台、カメラを所持する形になり、生徒が写真を撮影し作品を制作することが可能となった。風景画や人物画、静物画など、動きに乏しいモチーフを描くことに対し、写真表現は一瞬の動きを捉えることが得意である。

「水をつかまえる」という課題では、水に様々な動きを与え、その瞬間をカメラならではの「連写」機能を用いて写真に収める（タブレットの水濡れが気になる生徒は、透明な傘の内側から撮影するなどの工夫が考えられる）。撮影した写真作品はロイロノートを通じて提出させ、教室前方のスクリーンに作品を投影して作成した。

本校の取組について(令和3年度)

令和2年度を振り返ってみますと、新型コロナウイルスの影響を受けながらも、「ピンチをチャンスに」を合い言葉に教職員一丸となって取り組むことで、従来の教育活動を維持するとともにICT機器を活用した新しい取組にも積極的にチャレンジすることができました。

令和2年度卒業生(73期生)は、コロナ禍によって最後の大会やコンクール、文化祭も軒並み中止に追い込まれる中、それぞれが最後の舞台を失った喪失感を抱えながら、進路希望実現に向かって努力を続けてきました。その結果、例年以上の進路結果を残してくれました。ただ、大学入試制度改革初年度の影響も色濃く出始めました。特に共通テスト(旧大学入試センター試験)の内容に大きな変化が見られます。英語リスニング問題の配点増は大きな変化ですが、特筆すべきは、各教科とも従来の単純に知識を問う問題から、問題文から必要な情報を読み取らせたり、資料やデータから考察させたりする問題が増加している点です。そのため、読解力や思考力に弱みを抱える生徒は苦戦を強いられています。

では、国はなぜこのような大学入試制度改革に踏み切ったのでしょうか。それは社会の変化によります。戦後の高度経済成長下で求められる人材は、「指示されたことをミスなくこなす人材」でした。学校教育にも従順で均質な人材を大量に送り出すことが求められていました。ところが、現在ではグローバル化や高度情報化によって急激な変化が世界規模で進行しています。また、国内では急速な人口減少が始まろうとしています。このような変化が激しく予測するのが難しい社会では、自ら課題を発見し、様々な他者と協働して課題を解決できる人材が求められています。このような時代の到来が、大学入試制度改革を含む現在進行中の教育改革の背景にあります。

今、日本の社会で求められる人間像を考えると、洲本高校の校訓「至誠」「勤勉」「自治」「親和」の下で育まれてきた自由闊達な学校文化はまさに時代を先取りしていたこととなります。歴史と伝統によって培われた学校文化を背景に、戦後最大の教育改革といわれる新学習指導要領実施と大学入試改革に対応するために洲本高校は以下の取組を既に始めています。

- ① 授業時数の拡大(全学年が月木7限実施、「総合探究類型」は更に単位増)
- ② 2年文型A、文型Bの別を取りやめ、原則、国公立大学入試に必要な数学6単位履修
- ③ 画一的な講義式の授業から生徒が活動する授業への脱却(ICT機器の活用含む)
- ④ 「総合探究類型」の内容充実(県高大接続改革推進事業「学力向上モデル校事業」・県リーディングプロジェクト指定)
- ⑤ 「しんか(総合的な探究の時間)」の内容充実
- ⑥ キャリア教育の充実
- ⑦ 留学生招致からオンライン英会話導入

令和3年度は、先に述べた「自ら課題を発見し、様々な他者と協働して課題を解決できる人材」育成のために特に③④⑤⑥に注力しています。

③については、令和4年度入学生からタブレット型端末を各ご家庭で購入していただき、各自が授業に持参しコンピュータを活用した授業を進めてまいります。既に義務教育段階では国の予算で一人一台のコンピュータが実現していますが、県立高校では各自が高校指定の機種を購入することになっています。昨年度から既に県教育委員会の支援により、WI-FI環境の整備

や短焦点型プロジェクターの各ホームルーム教室への設置、200台以上のタブレット型端末の導入など教育のICT化が一気に進んできています。これらの新たな教育機器をいかに活用して生徒の興味関心を高め、学力向上につなげていくかが、今後の大きなテーマになっていますが、本校では、これらICT機器を積極的に活用する先生方が着実に増加しており、現在、一人一台の状況での効果的な授業についても研究を始めています。

④の「総合探究類型」では、一昨年度から、県高大接続改革推進事業(学力向上モデル校事業)の指定を受け、大学との連携を深めながら、生徒自らが課題を設定し研究や発表を行う「探究活動」に取り組んできましたが、昨年度は、この取組が県教育委員会から高く評価され、県リーディングプロジェクトに指定されました。この探究活動導入プログラムは、総合探究類型だけでなく、⑤2年時の「しんか(総合的な探究の時間)」に全クラス実施となっており、コミュニケーション能力や論理的思考力を鍛錬して生涯に渡って役立つ力を育成します。また、今年度から3年「しんか」で、個人研究論文を1学期に仕上げた後、個人ポートフォリオ(活動報告書)や希望大学を想定した自己推薦書を作成しています。2学期以降は、希望進路別の小論文講座や面接講座等を実施し、「個人探究活動と進路学習の連結」を図って⑥キャリア教育を一層充実してまいります。このキャリア教育では、3年間通して使用する本校独自のキャリアパスポートや「職業研究ワークショップ(1年)」、「学問研究ワークショップ(2年)」が大きな役割を果たしています。「職業研究ワークショップ」では、職業に関する視野を広げるとともに職業選択の可能性を広げるためにはどのような高校生活を送るべきか考えを深めていきます。「学問研究ワークショップ」では、本校卒業生を中心とした大学生・院生と2年生全員がZoomで繋がり、高校時代、大学・院での学び、将来のキャリアプラン等についてグループで質疑応答する中で、学問分野に対する学びを深めていきます。

令和3年度は、過去3年間の取組を更に充実させ、学力向上や進路指導の一層の充実に学校全体で取り組んでまいります。授業改善は大きく前進し、どの教科も生徒の生き生きした活動が実現できています。ただし、令和2年度末の職員研修では、教員側から「活動あって定着なし」という新たな課題が提起されています。ICT機器の活用も重要ですが、学力向上のための活動重視、ICT機器の活用であることは言を俟ちません。多くの教員がこの課題を強く意識し、授業改善の第2ステージが既に始まっています。また、進路指導では、3年学年団と進路指導室部との連携による進路指導がスタートしました。希望進路別に3から4名からなる教員グループで模擬試験結果の共有や助言内容について定期的に小会議を持つことで、生徒一人一人の進路希望実現をサポートしてまいります。

(詳細は学校案内パンフレットのp10をご覧ください。)

本校の取組について(令和2年度)

令和2年度は、新型コロナウイルスの影響で、令和元年度末から3ヶ月間の臨時休業を余儀なくされました。生徒・保護者の不安を受け止めつつ、家庭学習をいかに充実させ、学力を維持向上させるかという課題解決のため、学校全体で以下の取組を実施してきました。

- ① YouTube を活用した授業配信を多くの授業で実施（実技中心の授業は除く）
- ② 教育系 SNS、Edmodo を導入し、各教科からの連絡や課題の配布回収、確認テストを実施
- ③ Zoom を活用した双方向オンライン授業を一部授業で実施
- ④ 入学して間もない「総合探究類型」生徒も Zoom での発表・意見交換を実施
- ⑤ 県費負担でインターネット講座「スタディサプリ」を全生徒に提供
- ⑥ 進路指導部が、Google Meet を活用した4者面談を3年生就職・公務員志望者に実施
- ⑦ 登校可能日に個別面談を実施し、生徒の不安解消や学習相談を推進

休業中の生活に関する「生徒アンケート」(2年生)からは、約7割の生徒が、計画的に毎日の家庭学習に取り組んでいました。その中には自律的な学習習慣が身に付いたと回答している生徒も多数含まれています。本校教員による配信授業も、約9割の生徒が役に立ったと回答していて、スタディサプリが役立ったと回答した生徒が約7割であることから、本校教員による配信授業が、わかりやすく工夫されていたことがわかります。教育系 SNS Edmodo も約9割の生徒が役に立ったと回答しており、休業中の大きな支えになっていたことが窺えます(別添「74 回生 生徒振り返りアンケート結果」参照)。

6月からは、2週間の分散登校を経て通常授業に戻っています。分散登校の2週目には中間テストを実施しています。多くの県立高校で実施できなかった中間テストを実施できた要因は、休業中も家庭での学習を支援し、年間教育計画に沿った進行管理がある程度、実現できたことにあります。また、学力の維持向上だけでなく、高校生活を彩り、総合的な人間力を養うための伝統行事や部活動の活性化にも意を注いでできました。生徒会が中心になって、本校の伝統行事である「新入生歓迎行事」、1年生の学年レクリエーションも実現できました。また、イベントとしての部活動紹介も学校再開後すぐに実施することができました。入学後、すぐ2ヶ月もの自宅学習を余儀なくされ、自粛ムードの中、入学後の華やかな雰囲気を楽しむことのできなかった1年生も今やすっかり「洲高生」に溶け込んでいます。

教育課程上の大きな変更点は、従来、3年生だけが週2日7時間授業、1、2年生は、週1日の7時間授業であったのを令和2年度から全学年週2日7時間授業を実施しています。授業時間数拡大に加えて、2年生での文型A類型(私立大、専門学校等)、文型B類型(国公立大)と類型を分けていましたが、令和2年度から、文型を一本化し、数学の時間数を大幅に増やしています。これは、2年時での、文型A類型での学習意欲減退を防ぎ、国公立大学入試への対応力を身につけるとともに、将来、必要な数理的思考力を養おうとするものです。また、2年生では、「総合的な探究の時間」が始まっています。これも、コミュニケーション能力や論理的思考力を基盤に、生徒を生涯にわたって学び続ける能動的な学習者に育成する狙いがあります。以上のように、コロナ禍にあっても、「学びを止めない学校」を教職員全体で実現できたことが令和2年度の最大の成果であると考えています。

本校の取組について(平成31・令和元年度)

平成31年度・令和元年度は、平成30年度に決定した「本校で育成すべき力」について、その実現に向け具体的に進めています。

本校伝統の自由な校風とは、自由気ままに3年間を過ごすのではなく、様々な個性を持つ生徒が、お互いに刺激し合い、それぞれが自分でなすべきことを考え、日々、自己実現に励むことができる環境だと考えています。「多様な人々を受け入れ、協働できる幅広い人間性(校訓の「至誠」「親和)」を備え、「なすべきことを自分で考え、他者を巻き込みながら成し遂げる人物(校訓の「勤勉」「自治)」を育成してまいります。

「本校で育成すべき力」として次の3点、(1)「基礎学力・教養」、(2)「コミュニケーション能力・発信力」、(3)「物事を深く考え、課題を発見し、新たな解決法を創造する力」を伸ばします。方策として次の5点を実施しています。

① 授業改善

昨年度よりスタートした3人一組の授業研究会を拡大。今年度は、県の学力向上サポート事業で、淡路三原高校との共同研究を、昨年度の英語に引き続き、数学「反転学習」(1年)、「ジグソー法」(2年)で実施。公開授業週間と併せて研究会を開催。

② 小テスト、課題の見直し

各教科で実施してきた小テスト、課題の内容を精査し、基礎学力の定着と読解力・記述力の向上に資する内容に多くを変更。客観的指標として模擬試験のデータを活用。

③ 「総合探究類型」の教育内容充実

県の学力向上モデル校事業(高大接続改革推進事業)3校のうちの1校に採択。テレビ会議システムや、遠隔授業システムの導入、校内Wi-Fi環境の整備が実現。神戸大学や関西学院大学との連携が一層充実。関西学院WVLコンソーシアムに加入。

④ 「探究基礎」「総合的な探究の時間」のプログラム策定

1年「総合探究類型」学校設定科目「探究基礎」で、「読む、聴く、話す」に重点を置いたプログラムを開始。グループディスカッション、ポスターセッション、探究新聞(新聞記事についての質疑応答)、ディベートを組み合わせ、コミュニケーション能力と論理的思考力を総合的に育成。後半では、探究新聞を元に探究活動の課題設定。

次年度から導入される「総合的な探究の時間」のプログラムに継承され、学校全体の読解力・コミュニケーション能力、発信力の向上に活用。

2年「総合探究類型」では、単なる「調べ学習」ではない探究活動をスタート。年度末には「探究活動発表会」を実施予定。

⑤ BAIプログラムの本格実施(次ページ参照)

今年度は、新たに西はりま天文台ツアー(一泊二日)や神戸大学医学部や淡路医療センターとも連携を開始。

兵庫県学力向上モデル校事業(高大接続改革推進事業)

I 「課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(各学年2単位)」

1年「探究基礎」

「読む・聞く・話す」(論理的思考力・コミュニケーション能力育成)

- ・ グループディスカッション基礎/ポスターセッション基礎
- ・ 時事問題研究(新聞記事を題材に質疑応答)
- ・ ディベート(本校・八鹿高校・篠山鳳鳴高校 合同ディベート大会)
- ・ 科学英語基礎(English Camp)

「課題研究Ⅰ」

- ・ 大学教員による講演会「探究学習を始めるに当たって」
- ・ 探究への道(探究学習の基礎を学ぶ)
- 「論証」・「隠れた前提」・「情報収集」・「データ分析」・「レポート作成」
- ・ 神戸大学ルートプログラム一年生版導入
- ・ テーマ設定
- ・ 校内発表会
- ・ 合同発表会

2年「科学探究」(理系・医療系)／「教育探究」(教育系)

「課題研究Ⅱ」(神戸大学「ルートプログラム」等の活用)

- ・ テーマ設定
- ・ 課題研究
- ・ 校内発表会Ⅰ(日本語)
- ・ 校内発表会Ⅱ(英語)
- ・ 校外発表会準備
- ・ 合同発表会(本校・八鹿高校・篠山鳳鳴高校)

3年「しんか」(テーマ別課題研究)

「課題研究Ⅲ」(「総合的な探究の時間」)

- ・ 課題研究
- ・ 最終論文作成
- ・ その他複数テーマについて小論文作成

県立洲本高等学校 特色選抜「総合探究類型」

兵庫県学力向上モデル校事業(高大接続改革推進事業)

Ⅱ 「高大連携」及び「校外学習」(B.A.I プログラム)

		理系プログラム	医療系プログラム	教員系プログラム
1 年	1 学期	教育実習生との交流会 (6月6日) 講義「探究活動を始めるに当たって」(京都大学 石井 英真先生)		
	夏 期 休 業	SSH生徒研究会発表会見学 (8月8日AM) 神戸大学医学部施設見学・講演会 (8月8日PM) (神戸大学 石田 達郎先生) 夏休みサイエンス体験広場出展 (文化会館) 神戸大学マリンサイト実習参加 (8月29日・30日岩屋)		
	2 学 期	校内ディベート大会 (医療課題について) (神戸大学 石田 達郎先生) 数学・理科甲子園出場 淡路医療センター見学 (10月31日 (木) 14:45～ 1時間) 「高大連携課題研究合同発表会 in 京都大学」参加 関学リサーチフェア・リサーチフォーラム参加 講演「淡路島の自然の現状と課題」(11月28日) (*環境省自然公園指導員 生嶋 史朗先生) 探究合宿「先端科学見学ツアー」(宿泊:西はりま天文台)1泊2日		
3 学 期	講演「淡路島の医療について」(*淡路医療センター 杉本 貴樹先生) サイエンスフェアに参加 (2月2日 ポートアイランド 国際展示場) 「高校生国際問題を考える日」に参加 (大阪大学) 1日体験に参加 ・小学校・中学校での授業見学			
2 年	1 学 期	ふれあい看護体験に参加 講演「シミュレーションによる宇宙環境理解」(*神戸大学 臼井 英之先生) ・特別支援学校との交流会		
	夏 期 休 業	神大ルートプログラム等を利用して課題設定 (アカデミック・インターンシップ) ・鳴門教育大学オープンキャンパス ・ふれあい学童保育		
	2 学 期	数学理科甲子園出場 Spring-8 見学 「高大連携課題研究合同発表会 in 京都大学」参加関学リサーチフェア・リサーチフォーラム参加 講演「色々な電磁波で見る宇宙」(*名古屋大学 森鼻 久美子先生、兵庫県立大学 本田 敏志先生) 未来探究東京ツアー (東京大学・筑波大学本校OB研究室及び株式会社メディセオ訪問・2泊3日)		
3 学 期	数学オリンピック出場 サイエンスフェア参加・発表 「高校生国際問題を考える日」参加講演 「地域の医療 (高齢化社会での課題)」(神戸大学 石田 達郎先生 (予定)) 講演「ナノサイズの積み木遊び」(*京都大学 瀧川 紘先生)			
3 年	1 学 期	しんか (高大接続) 「生命科学の研究」	しんか (高大接続) 「看護学特別講座」 関西看護医療大学による特別講座 (10回)	しんか (高大接続) 「異文化研究」・ 「家庭科総合研究」
	2・3 学 期	しんか (高大接続) 「医療課題の研究」		しんか (高大接続) 「教育課題の研究」

*は過去の実績

本校の取組について(平成30年度)

平成30年度は、120年の歴史と学校文化を基盤に、時代のニーズに対応した新しい取組にも、着手しました。具体的には、(1) 授業力向上 (2) 新学習指導要領への準備 (3) 総合探究類型の内容充実 (4) 高大連携事業の推進 (5) グローバル化への対応 です。以下に詳細を記述します。

(1) 授業力向上

3人一組の授業研究グループを立ち上げ、学期ごとに授業研究会を実施。その授業で「何が身につくか、何ができるようになるのか」を明確にした上で、授業方法や評価方法の工夫について全教員で研修。10月に公開授業週間を実施し、保護者(中学生の保護者含む)に授業を公開。英語科では、県の学力向上サポート事業を活用した「生徒が活動する授業」TANABUモデルの研究開始。

(2) 新学習指導要領への対応

- ・本校で、「どのような人間像を育成すべきか」また「どのような力を身につけさせるべきか」について全教員で意見交換し、授業・特別活動・部活動等すべての教育活動でどのように実現するのか討議。
- ・大学入試改革に対応するため、1年生全員がスコア型英語テストGTEC受検。
- ・1年「総合探究類型」で探究学習の研究開始。

(3) 「総合探究類型」の内容充実

「総合探究類型」平成31年度(令和元年度)入学生から、3つの目指すべき職業群として①理系、②医療系(医師、看護師、薬剤師等)、③教育系(文系含む)を設定し、新たにBAI PROGRAM(Beyond Artificial Intelligence PROGRAM)を策定開始。

(4) 高大連携事業の推進

インスパイアハイスクール事業(県立高校特色づくり事業)等による高大連携事業の一層の推進。特に3年「しんか(総合的な学習の時間)」で関西看護医療大学による専門的な出張講義を毎年継続実施。

(5) グローバル化への対応

海外からの留学生を数ヶ月間招致しての国際交流、文化交流促進。平成30年度は、オーストラリアから2人の留学生を5ヶ月間(2年生)、3ヶ月間(1年生)招致。

特に(2)では、職員討議を経て、「育成したい人間像」「身につけさせるべき力」について以下のように決まり、生徒、保護者とも共有を図っています。今後は、この実現に向けて学校全体で取り組んでまいりますので、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。

本校の目指すべき人間像・育成すべき力-平成 30 年度職員討議から-

目指すべき人間像（校訓「至誠・勤勉・自治・親和」の具現化）

・幅広い人間性

「多様の人々を受け入れ、協働できる幅広い人間性」

協調性、協働性、受け入れる力、認め合う力(25)

思いやる気持ち、人のために働く気持ち(7)

グローバルセンス(ワールドワイド)(3)

合計 35

・たくましい人間力

「なすべきことを自分で考え、他者を巻き込みながら成し遂げる人物」

自主性、主体性(11)・行動力、実行力、能動的姿勢(20)

リーダーシップ(9)・向上心(5)・学び続ける姿勢(3)

忍耐力、根気強さ(11)・体力(8)

合計 67

本校で育成すべき力

1 「基礎学力・教養」

基礎学力、教養(18)・読解力、読み書き力(12)

合計 30

2 「コミュニケーション能力・発信力」

伝える力、表現力、発信力、プレゼン力(26)

コミュニケーション力(13)

合計 39

3 「物事を深く考え、課題を発見し、新たな解決法を創造する力」

判断力、決断力(12)・想像力、先を読む力(4)・探究心、興味、関心(9)

思考力(10)・創造力、発想力(6)・課題発見力(5)

応用力、学んだことを生かせる力(7)

合計 53

※各項目の（ ）内数字は、教員の意見集約、必要と感じた教員のべ人数